様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 3 月 25 日現在

機関番号：15201
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2010
課題番号：21720176
研究課題名（和文）　英語史における空の虚辞主語の消失に関する実証的・理論的研究

研究課題名（英文）　An Empirical and Theoretical Study on the Demise of Null Expletive Subjects in the History of English

研究代表者
縄田　裕幸　（NAWATA HIROYUKI）
島根大学・教育学部・准教授
研究者番号：00325036

研究成果の概要（和文）：本研究では，英語史における空主語 (pro) の消失・動詞第二位語順 (V2) の消失・動詞屈折接辞衰退の相関関係を，極小主義理論の枠組みを用いて考察した。より具体的には，pro の消失は直接的には V2 の消失によって，また間接的には動詞屈折接辞の衰退によってもたらされたことを明らかにし，当該の変化を説明するための理論モデルを構築した。さらに，このモデルを心理動詞 like が現れる構文の通時的変化に適用し，与格経験者項が主格経験者項に置き換えられた過程を分析した。

研究成果の概要（英文）：This study investigated the causal relation among the demise of null subjects (*pro*), the loss of verb second (V2), and the decline of verbal inflectional morphology in the history of English under the theoretical framework of the minimalist program. It was demonstrated that the demise of *pro* was caused directly by the loss of V2 and indirectly by the decline of verbal inflection. I developed a theoretical model to account for the change in question and confirmed its validity by applying it to another diachronic change, the loss of non-nominative Experiencers of the psych-verb *like*.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・英語学
キーワード：英語史・統語論・生成文法・言語変化・形態論・空の虚辞主語・動詞第二位現象

１．研究開始当初の背景

(1) 英語の形態的変化と統語的変化の関係

本研究は，研究代表者（縄田裕幸; 以下代表者と呼ぶ）が平成 19 年度から 20 年度にかけて科学研究費補助金の助成を受けて実施した「英語史における動詞屈折接辞衰退の統語的影響に関する研究」（若手研究(B): 課題番号 19720113; 以下 19 年度科研と呼ぶ）をさらに発展させる研究として位置づけられる。19 年度科研において，代表者は動詞屈折接辞の豊かさと動詞第二位語順 (verb second: V2) の間に一定の相関関係があり，次の一般化が成り立つことを明らかにした。

・ もしある言語が弁別的な数の一致を持つならば，その言語は V2 語順を示す。

代表者の調査によれば，動詞が数の一致形態素を示す中英語のテキストでは V2 語順が残存し，数の一致が衰退したテキストでは，V2 語順も消失していた。代表者は生成文法（極小主義）の枠組みに立脚し，上の一般化を細分化された機能範疇句構造（図 1）と屈折接辞派生の仕組みを用いて理論的に説明した。

$[_{TopP}$ topic/þa Top^{u} $[_{FocP}$ wh/ne/Op Foc $[_{TopP}$ topic/pronoun Top^{l} $[_{FinP}$ Fin $[_{TP}$ subject NP T $[_{vP}$ …]]]]]]

図 1: V2 に関連する統語構造

その成果は平成 20 年度の日本英語学会研究奨励賞を受賞し，高い評価を得ることができた。

しかしながら，英語史的統語論の先行研究においては, V2 語順の消失はもう一つの統語的変化，すなわち空の虚辞主語 (pro) の消失とも連動していると指摘されている。これは，次のような一般化としてまとめられる。

・ もしある言語が V2 語順を示すならば，その言語は空主語 pro の出現を許す。

したがって，英語では，以下の 3 つの変化が同じ時代に生じたことになる。

(a) 数の一致形態素の衰退
(b) V2 語順の消失
(c) 空主語 pro の消失

代表者は 19 年度科研において (a) と (b) の関係を調査したが，(a) と (c) の関係および (b) と (c) の関係は，着手されていなかった。

(2) 心理動詞構文の変化に関する問題

本研究では，分析の対象とする構文の 1 つに，like 型心理動詞が現れる構文（以下 like 型構文）を選定した。現代英語と異なり，古英語から初期中英語までの like 型構文では，経験者項がもっぱら与格で現れた。また，主題項は名詞句の他に “Me likes (it) that S V …”のように節として現れることもあり，その場合には虚辞 it が随意的に現れた。先行研究では，この it が現れない場合でも空の虚辞主語 pro が生じていると分析されることがあり，本研究の射程に含まれる。

この like 型心理動詞の通時的変化で問題となるのは，与格経験者から主格経験者への置換のメカニズムである。伝統的には，この変化を引き起こした要因として，名詞の与格が主格と同形になったことが挙げられることが多い。例えば “God liketh thy requeste” のような文において，元来 God は与格目的語であったが，格語尾を失って主格と同形になった上，動詞の前に置かれているために，主格主語として再分析された，と考えられてきた。

また生成文法による分析でも，当該の変化は格または語順に関する単一のパラメター変化に帰せられてきた。しかし, Allen (1995) による詳細な調査は，英語史における与格経験者の主格経験者による置き換えが，数世紀にわたる長期間の変化であったことを明らかにした。これは，言語変化が突然，急激に生じるという生成文法の言語観にとって深刻な問題となる。

２．研究の目的

上記の背景から，本研究の具体的目標として以下の 2 点を設定した。

・ 空主語 pro の消失のメカニズムを，動詞屈折接辞の衰退と V2 語順の消失との関連で明らかにすること。
・ like 型構文における与格主語から主格主語への変化のメカニズムを，極小主義の立場から説明すること。

これらの問題の解明を通して，形態論と統語論のインターフェイスに関するモデルを構築することを目指した。

３．研究の方法

本研究では，実証的調査と理論的研究を平行して進め，両者を最終的に統合し，空主語 pro の消失についての記述的・説明的に妥当な理論を構築する手法を採用した。

(1) 実証的調査：動詞屈折接辞の衰退が進行しつつあった中英語期の代表的散文作品をいくつか選び，それぞれのテキストにおいて屈折接辞がどの程度衰退していたのかを調査するとともに，空主語 pro が観察されるかどうかを調べた。また資料の収集にあたっては，Penn-Helsinki Parsed Corpus など，既存の電子コーパスも活用した。

(2) 理論的研究：形態論と統語論のインターフェイスに関するモデルを作るための作業である。本研究の理論的基盤である極小理論および分散形態論の最新の動向を探るため，文献調査を進めるとともに国内外の関連学会に参加し，情報を収集した。

(1) の調査結果から，動詞屈折接辞がどの程度衰退した段階で空主語 pro が消失したのか分かるはずである。それを (2) で構築した文

法理論に照らして，必要に応じて資料の再検討および理論の修正を行いながら，空主語 pro の消失に関する記述的・説明的に妥当な理論を構築していった。

４．研究成果

上記の「研究の目的」に掲げた 2 点の目標に関する成果とその波及効果は以下の通りである。

(1) 空主語 pro の消失のメカニズムについて

雑誌論文③に挙げた “A Note on the Person Split of *Pro*-Drop in Early English” によって成果を公表した。上の「研究の背景」で触れた通り，空主語 pro は V2 語順とともに後期中英語に消失した。また，先行研究では，次の事実が指摘されている。(i) いくつかのテキストにおいて，空の虚辞主語 pro に加えて指示的代名詞としての pro が観察される。(ii) ただしその場合でも，pro は 3 人称の解釈しか持つことができず，1 人称・2 人称としては解釈されない。

これらの事実を説明するため，この論文では以下のような提案を行った。

① 人称代名詞，再帰代名詞などを含む広義の代名詞類は，共通の統語構造 [$_{DP}$ D n] を持つ原始要素 PRONOUN の異なる音声的具現形である。空主語 pro は，PRONOUN が音声的に具現化されない場合に生じる。

② PRONOUN は以下の条件をともに満たす場合，音声的に具現化されない。(i) PRONOUN の φ 素性の値が，それが生じている最大投射の主要部 X の φ 素性の値と一致する。(ii) PRONOUN の指示対象が，X に挿入された形態素から復元可能である。

③ 数の値のみを指定され，人称を指定されていない PRONOUN は，不履行の解釈規則により 3 人称として解釈される。

これらの提案と，上の図 1 に示した V2 の節構造に基づいて空主語 pro が認可される構造を図示すると，図 2 のようになる。

[$_{TopP}$ PRONOUN$_{i[sg.]}$ Top$_{[sg.]}$ [$_{FinP}$ Fin$_{[3.]}$ [$_{TP}$ t_i T [$_{vP}$ t_i …]]]]

図 2: 空主語 pro が認可される構造

この構造で，機能範疇 Fin は人称に関する動詞屈折を，Top は数に関する屈折を，それぞれ担っている。また PRONOUN は数に関する素性のみを指定されている。TopP 指定部の PRONOUN の φ 素性の値と，主要部 Top の φ 素性の値が一致している点に注意されたい。加えて，古英語・初期中英語では動詞が数の一致に関する弁別的な形態素を持っていた。よって提案 ② により，PRONOUN は音声的に具現化されない（すなわち，pro として具現化される）ことになる。

また，図 2 において PRONOUN が発音されないのは，数に関する素性のみを持ち，一致に関する素性を持たないときに限られる。ここから，提案 ③ により，当該の pro は必ず（虚辞的なあるいは指示的な）3 人称代名詞として解釈される。

虚辞的 pro と指示的 pro の違いは，性 (gender) 解釈の有無にあるとした。虚辞としての pro は性に関する素性を必要とせず，図 2 の構造で直ちに認可される。しかしながら，もし話者が性の解釈を談話から復元することができれば 3 人称の指示的 pro としても解釈することができる。指示的 pro が生じるのが一部のテキストに限られることから，談話から性の解釈が復元可能かどうかは，個別の話者によって異なると考えられる。

代表者は，19 年度科研において，後期中英語に動詞が数の一致形態素を失うと，それに伴って一致素性の分布と主語の位置が変化した，と提案した。具体的には，数と人称の屈折がともに Fin によって担われ，主語が一律に TP 指定部に生じるようになったことで，V2 の消失がもたらされた，という分析を行った。その提案に基づき，後期中英語の非 V2 構造に PRONOUN を配置すると，図 3 のように表される。

[$_{FinP}$ Fin$_{[3.sg.]}$ [$_{TP}$ PRONOUN$_{i[(3.)sg.]}$T [$_{vP}$ t_i …]]]

図 3: 空主語 pro が認可されない構造

この構造で，PRONOUN は FinP 指定部ではなく TP 指定部に生じており，提案 ② の (i) の条件を満たしていない。よって，PRONOUN は義務的に音声化を受けることになり，空主語 pro は認可されない。

以上のように，空主語 pro の消失は，直接的には V2 の消失をもたらした構造変化によって引き起こされたといえる。また当該の構造変化が数の一致の消失に起因することから，動詞屈折の衰退も空主語 pro の消失に間接的に関わっていると結論づけられる。

(2) like 型構文における与格主語から主格主語への変化のメカニズムについて

雑誌論文①に挙げた “Gradual Parametric

Change? Revisiting the Loss of Non-Nominative Experiencers of *Like*” により成果を公表した。この論文では，like 型構文における与格主語から主格主語への置換を，次の 2 つパラメターで説明しようと試みた。

(a) 形態的与格の利用可能性: yes/no
(b) CP 指定部での主語の認可: yes/no

古英語から初期中英語では，(a) (b) ともに yes であったため，like 型構文の基底構造は図 4 のように表される。EX, TH はそれぞれ経験者項，主題項を表す。また，説明の便宜上単純な CP-TP 節構造を用いる。

$[_{CP}$ C $[_{TP}$ T $[_{VP}$ $[_{PP}$ P EX] V TH]]]
図 4: 与格経験者構文の構造 I

この構造で，経験者項は音声的に空の P から内在的与格を付与される。

14 世紀半ばに上記 (a) のパラメターが yes から no に変化すると，経験者項に与格を付与していた空の P も消失し，その結果経験者項に格を付与する機能範疇 v が新たに必要となった。その際，経験者項を vP 指定部に生成するか VP 指定部に生成するかで，図 5, 6 の 2 通りの構造が利用可能であった。

$[_{CP}$ C $[_{TP}$ T $[_{vP}$ EX v $[_{VP}$ V TH]]]]
図 5: 主格経験者構文の構造

$[_{CP}$ C $[_{TP}$ T $[_{vP}$ pro v $[_{VP}$ EX V TH]]]]
図 6: 与格経験者構文の構造 II

図 5 では，経験者項は T によって主格を，主題項は v によって目的格を，それぞれ与えられ，現代英語と同様の主格経験者構文が派生される。それに対し，図 6 では v はより近い経験者項に目的格を与えるため，主題項は T から主格を得なければならない。ただし，そのままでは T と主題項の間に介在する経験者項によって Agree が阻止されてしまうため，主題項は CP 指定部に V2 移動する途中に立ち寄る vP 付加位置で主格を付与される。その構造は図 7 のようになる。

$[_{CP}$ TH C $[_{TP}$ $T_{[3.pl.]}$ $[_{vP}$ t_{TH} $[_{vP}$ pro v $[_{VP}$ EX like $t_{TH}]]]]]$
図 7: 与格経験者構文での主題項の移動

しかしながら，16 世紀初頭に上記 (b) のパラメターが yes から no に変化すると，CP 指定部で主題項を主語として認可することができなくなり，図 7 に示した移動を格付与のために利用できなくなった。これにより，like 型構文から与格（非主格）経験者が消失した。

したがって，与格経験者の主格経験者による置き換えが，数世紀にわたる長期間の変化であったことは，上記 (a) と (b) のパラメター再設定に時間差があったことから導かれ，当該の変化を生成文法の言語観と矛盾しない形で説明することができる。

(3) 波及効果

本研究の理論的意義として，いわゆる「空主語パラメター」を形態論と統語論のインターフェイスから説明した点を挙げることができる。この成果を通言語的に応用したのが雑誌論文③に挙げた “On the Resetting of the Subject Parameter by Japanese Learners of English: A Survey of Junior High School Students”である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① NAWATA, Hiroyuki “Gradual Parametric Change? Revisiting the Loss of Non-Nominative Experiencers of *Like*,”『近代英語研究』27, 75-99, (2011) 査読有
②NAWATA Hiroyuki and TSUBOKURA Keiko “On the Resetting of the Subject Parameter by Japanese Learners of English: A Survey of Junior High School Students,” *Second Language* 9, 63-82, (2010) 査読有
③ NAWATA Hiroyuki “A Note on the Person Split of *Pro*-Drop in Early English,” *Synchronic and Diachronic Approaches to the Study of Language: A Collection of Papers Dedicated to the Memory of Professor Masachiyo Amano*, ed. by Hirozo Nakano, et al., Eichosha, Tokyo, 217-230, (2010) 査読無

６．研究組織
(1)研究代表者

縄田　裕幸　（NAWATA HIROYUKI）
島根大学・教育学部・准教授

研究者番号：00325036

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：